



書
評



亀口憲治著 家族臨床心理学
—子どもの問題を家族で解決する—
東京大学出版会 2000年 (A5版 267ページ)

杉下 知子 (東京大学大学院医学系研究科家族看護学)

本書は序章にあるように著者亀口憲治氏の今までの活動の集大成である。

小中高校生にみられる非行、不登校、家庭内暴力等の解決のために本人と両親を含めた家族全員を対象とする家族臨床実践をわが国で先進的に取り組み、この成果をベースに家族臨床心理学についてその理論から実践まで詳しく解説した力作である。

本書の構成は4章から成り、これに序章と終章が加わっている。

序章では、著者の家族療法との出会いとこれを家族臨床心理学へと発展させた経緯について述べられており、新しい領域を開拓する道筋を理解するのに役立つ。

第1章「家族の現状と家族臨床」では生涯発達と家族臨床の特性を述べたあと、各領域すなわち、精神保健、社会福祉、学校教育、司法・矯正、産業・労働、コミュニティ、ジェンダー等の中での家族臨床のかかわりを述べている。この中で看護・介護の領域との関係も紹介し、家族看護学についても言及している。

第2章「家族臨床心理学の理論」では精神療法の中で誕生した家族療法、さらには心理療法の進化から派生した家族臨床心理についてその理論背景を歴史的にたどり解説している。二重拘束理論をもとに家族システムについても具体的な説明をコンパクトにまとめてあり、全体像を理解する助けとなる。

第3章「家族臨床的援助の方法」では、方法論について具体的事例を挙げてわかりやすく解説している。

第4章「家族臨床心理学の臨床事例」では、著者の臨床例から特選した代表例を面接の場面や経時的变化のプロセスを紹介し、その臨床効果をわかりやすく示している。

終章では、人間の関係性という複雑系へのアプローチとして心理臨床の意義と今後の展望を語っている。

本書は臨床知を科学的に分析し、家族のもつ原則論を導き出そうとした半世紀にわたるこの領域の試みを、わかりやすく解説しており、家族システム看護の源泉が多く含まれている。家族看護学の実践者・研究者・教育者に是非契めたい良書である。